

「しりうごと」：源氏物語第二部構想の基底にあるもの

著者	堀井 博
雑誌名	日本文学誌要
巻	5
ページ	23-28
発行年	1960-06-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019000

しりうと

源氏物語第二部構想の基底にあるもの

堀井 博

女三の宮の降嫁が決定したとき、源氏はすでに四十の賀を間近にひかえていた。子ゆえの闇にまよった朱雀院は、出家のさまたげである女三の宮を、朱雀院とそれほどがわずに出家するであろう源氏へ、多くの求婚者たちをしりぞけて降嫁させたのであった。多くの求婚者たちをしりぞけて、源氏に降嫁させたことに朱雀院の失敗があり、その失敗は、有望な求婚者の柏木をして、女三の宮との密通という事件を起させてしまった。朱雀院の源氏への予測は見事にはずされたばかりでなく、紫の上と源氏とのふたりの愛の危機も、女三の宮の降嫁によっておとづれる。朱雀院の源氏への予測の失敗は、実は朱雀院にかえってゆかないで、永年築き上げて来た源氏と紫の上兩人の愛、その心のうちをおかしていくのである。そして、紫の上が女房達の「しりうごと」する言葉に対して「世の人にもらさじ」と受けとめようとするとき、彼女は、「対の上」の位置からずり落ちねばならなかったのである。このような紫の上の心理の追究のうらで、柏木の性格はかたちづくられ、柏木登場の場が設定されている。源氏・紫の上兩人の間の愛の危機の深まりは、柏木の「ひたぶる」な性格造型をうちに秘めつつ進行し、外面的にも密通とい

う極端な行為を引き出し、物語の細部にまで、事件の荷うものとして、逆に働きかけて来るのであった。柏木と女三の宮の密通の事実が、女三の宮の手落ちから、源氏に知られてしまい、秘事が源氏心のうちでだけ公然となったとき、源氏は空酔いにかくれて柏木に語る。「衛門の督心とどめてはほえまるる、いと心はづかしや。さりともしばしならむ。さかさまにゆかぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり。」——柏木は、引きづられるように、死に向って走らねばならない。源氏物語第二部は源氏の老年に移り行く物語であろう。老年に移り行く物語といっても、第一部三十三帖の大方に共通した話の運び方で、准太上天皇光源氏の運命を語り継ぐといったものではなく、第一部において、筋立てに関係しないところで優れた形象をかちえた人間的なものが、はじめて構想と密接な関係をもち、構想と人物形象を結びつけた、といってよいだろう。そのことをたしかめてみるために、朱雀院の失敗・予測のあやまりとして語り出される女三の宮の降嫁における女房の役割りを、まず検討してみよう。朱雀院は愛娘女三の宮を「片生ならむことをば見隠し教え聞えつべからむ人」にあづけようとする。はじめに、長い年月をかけて雲

井雁を得た夕霧の女三の宮降嫁の婉曲なことわりがあり、その様子を「のぞき見」していた女房達の源氏の推薦は、朱雀院をして、すぐに、まったく少しでも夫婦らしい生活を送らせようとする娘を持った父親なら、娘を源氏の傍におきたいと思う、という希望を述べさせるのである。そして、乳母・左中弁の兄妹が源氏への降嫁の橋渡し役として登場する。作者は「院はあやしきまで御心ながく、仮にても見そめ給へる人は、御心とまりたるを……」「あまたつどへ聞へ給へれど、やむごとなく思したるは限りありて、一方なめれば……」と橋渡し役左中弁をして院の心中を推察させながら、物語を進めてゆく。乳母、左中弁、女房達は「棄てつる中にも、棄てがたき」事件、女三の宮の降嫁の方向を朱雀院と誘引、反発する中で、かたちづくる。乳母、女房達は「仕うまつりよくなむある」ように仕える、主人女三の宮の宿世の浮き沈みを共に生きねばならない「いやしき宿世」にはぐくまれていればこそ「御子達はひとりおはしますこそ例のことなれど」「……人のそねみあべかめるを、いかで靡もすゑ奉らじ」などと降嫁に対する不安と狼狽を、自己のものとして感覚せずにいられない。そういう真実さを保ちながらも、王朝貴族社会の美徳を裏側で支えている世俗的規範が、強く桎梏としてこれらの足下にあるがゆえに、源氏への降嫁の不安と狼狽を否定してゆくのである。そう否定してゆかねばならない乳母左中弁の二重の構造は、単にかねらの心の表裏として説明されずに、降嫁に直接かわるものとして、朱雀院の意図を進行する物語の中で切り刻み、降嫁の方向を決定してゆくのであった。そのことは、物語登場人物の心の内部から表面へ、降嫁の問題を問題として押し出して行こうとする刺戟を、朱雀院に与えずにはいなかった。

たとえば、浮舟の巻での右近、小侍従は、大君の影を追う薫よりも、好色の匂宮の方に求愛の真実さを見、浮舟の手足になって、あくまでも女房の立場ではあるが、わが身のほどにかかわらず、女房の「さかしさ」から匂宮の求愛を真摯に受けとめずにいられなくなる。薫、匂宮、浮舟の関係を左右する役割りを荷うように登場してくる。それに対して、この乳母、左中弁、女房達の「下人」の「さかしさ」は、朱雀院との関係としてあり「さかしさ」を「さかしさ」として、みずから「いやしき宿世」と分別することがない。

さて、朱雀院は、御子達の「世づきたる有様」には感心することはない。そうかといって「高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ」残念なことも癪にさわることも生ずるらしい、とも考えている。『栄華物語』の朱雀帝の娘昌子内親王の入内の記録を引用するまでもなく、皇女の入内、立后は困難をきわめることから、大宝令が皇族の尊貴を保護することとあらはらに、当時においては、非人間的な皇女の独身が慣習化されていた。そして、思案のはて、「かの六条の大臣は、げに、さりとて物の心得て、後安き方はこよなかりなむを、方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし」と判断し、朱雀院は物の心得ている源氏の背後をおそうのである。その際、源氏の「ふりせぬあたけ」だけが心配なのであるが、しかし、朱雀院は女三の宮を皇女にふさわしい行末を与えようと、異常な執着をもつ。終生独身——皇女という身分にふさわしいそういう生涯の渡り方の有効性をこの社会が見失ってからはすでに久しい年月を経過している。愛娘なればこそ、皇女にふさわしい人間をさがし出さねばならない。娘の身のふり方に迷う朱雀院の人間的な苦悩は、絶えず現世的なものに愚弄されまいとしな

がら、愚弄され、嘲笑されてしまうもの姿であろう。桐壺の巻における源氏の出生のように、女三の宮は朱雀院と更衣との愛の結晶として語り出されてはいるが、女三の宮がそれを背負って彷徨すること許さない女の宿世があり、それは単に朱雀院の「子故の闇」の説明のための挿話になっている。そして、院の出家のさまたげである愛娘の行末という現世的な問題に、心を左右されまいとするとき、乳母、左中弁、女房達が物語のうえで荷う役割りが出現する。朱雀院の戸惑いの「棄てつる中にも、棄てかたき」事件をめぐって、物語の中では、さかしき下人が現実的に皇女の降嫁を事実的に左右して行ったのである。そして、直接朱雀院に返って行かない場所語られる「いやしき宿世」ゆえに逃れることのできない「さかしき」は、投げ出され、提出されたまま、不吉な予感となり、物語の内部へ沈潜していったのだろう。宮仕えをしている小侍従、乳母、女房達は受領、大夫層の出身であろうけれども朱雀院の前にしては「下人」と卑下せねばならない矛盾を持ちながら、貴族階級の複雑な層、特に受領、大夫層の意識をもっていたことはほぼうか^{註1}がい知ることができよう。

朱雀院は、とにかく、問題は本人の心次第、と語りながら、一方的に「物の心」をえている源氏に、朱雀院、乳母、女房達、左中弁各々の不安と狼狽を振り切るかたちで話を進めて行った。源氏を讃嘆する女房達の言葉にひかれて、朱雀院には、眩しいほど自由な生活を送って来た源氏にひきかえ、同じ男兄弟でありながら、帝の位をしめた自分ではあつてもとても、という一方的な感嘆と嫉妬だけがあり、決心の動揺も、半面での拒否も起こらない。物語の進行の中では、求婚者と朱雀院が関係するところで起こる動揺もなく、ひ

たすらわが子の行く末を配慮するこの朱雀院の輪郭相貌をゆるぎないものとするばかりである。女三の宮の婿がねとして登場する兵部卿、別当大納言、柏木への朱雀院の批評のなかに、それは明瞭に見られるであろう。^{註2}兵部卿は「なよびゆめく」、藤大納言は身分が軽い、柏木こそは源氏でさえ「公卿といへど、この人の覚えに、必ずしも並ぶまじきこそ多かれ」（胡蝶）と玉鬘への柏木の恋文を見て述べねばならなかったほどだが、院は、「年いと若くて、軽びたる程なり」というのである。柏木は二十三才、兵衛督、拔群の位である。当時ありえなかった地位と年令の関係であることが考証されている。^{註3}そして源氏への降嫁は東宮の賛同によって決定された。東宮の賛同がなければいけなかったのである。賛同が源氏への降嫁の決着点として、動かすことのできない方向を賦与した。これは、物語のうえで現実的な力として作用している。

若菜上ではじめに語り出された女三の宮の源氏への降嫁決定は第二部の序章としての意味をもっている。異常な事件として語り出され、異常さが問題の所在を明瞭にしているし、それが源氏、紫の上の危機となって語り継がれるとき、問題の所在ばかりでなく、その性格は漸次露呈されてくる。ここで問題の性格を性急に論じる前に、もう少し物語に沿って考えてみよう。

源氏を取巻く女性たちが各々「思ふさまに定まっている」六条院で、朱雀院の使者在中弁に対し、女三の宮も父宮を同様にお思いでしょうが、ただ私も老先短く、途中でお世話できまいか、と不安な事だけが心配で、と源氏は答えたが、朱雀院との対面では、どうにもならず、朱雀院の言い出し兼ねているのを、見かねて、源氏の方から引き受けてしまったのである。源氏が女三の宮を引き受けたと

き、それは「ふりせぬあたけ」となって源氏に返って来てしまふ。源氏はただ、紫の上がどう思うだろうと、そればかり心にかかるのである。紫の上は紫の上で、朝顔の君、玉鬘の時を想い出し、降嫁を「とかくのがれ聞えし」様を源氏から聞いたとき、女三の宮は「空から」降嫁したと表現せねばならない。源氏、紫の上兩人は、お互に相異なる苦悶を背負込んでしまった。深い情愛や品位を兼ね備えた源氏に、女三の宮の降嫁は「ふりせぬあたけ」としてはね返ってくる。いまは源氏・紫の上の永年築いて来た愛情の世界の外側へ立ち、いまさらに源氏は、紫の上への愛情を告白する。紫の上が源氏をいかに思い疑うであろうと、源氏は、紫の上へ思いを馳せ、告白が告白とならない心のうちで、紫の上をいとおしんでいるのである。情愛深く品位ある源氏は、「ふりせぬあたけ」ゆえに苦悩する。昔、須磨、明石に流された事件の当事者朧月夜を訪ねる。そこでは兩人の苦しかった逢う瀬が、藤の花の季節として語られ、藤の花の象徴的な美しさも、源氏にとって「さも移り行く世かな」と詠嘆述懐しないですむ唯一の場所にほかならなかった。「名残り多く残りぬらむ物語の」とじめは、げに残あらせまほしきわざなめるを——作者紫式部は源氏と朧月夜との美しい唱和、述懐を、それだけでは終せることができない。「いみじく忍び入り給へる」と直接源氏の帰邸する姿を、紫の上に結びつけて行くのである。それは、女三の宮の降嫁と云う問題の性格と微妙な関係を持っているし、それは、第一部三十三帖で語り継ぎ物語られた源氏の運命と優れた形象、いい換えれば、源氏物語第一部においての人物形象と構想の基底にあるものと、ずっと異ってきている。

桐壺、濡標の巻で予言として語られた源氏の運命は、終始変容す

ることがなかった。藤壺、明石の上、葵の上も、源氏とのあいだに子供達を置いて、もっぱら源氏のこの運命の方向をかたちづくっている。又、雨夜の品定めからはじまる源氏の女性遍歴は、筋立てを拒否したところで、女性の意志や感情が語られ、源氏の心情の世界を、それらの女性に荷わせ、語らせる。ひとりの女性が源氏の運命を左右し、動揺を与える隙間すらもなかったようである。こうして桐壺の巻の高麗の相人、濡標の巻の宿曜師の予言が展開成立したことは明らかだ。第一部三十三帖の構想の基底にひそむものは、ここに見いだされないだろうか。源氏の運命とかかわりないところでの、かれと女性たちとの生活であつたろうし、情愛深く品位のある源氏も予言を背に形象されたものではあろうが、逆にいえば、情愛深い源氏の優れた形象は運命と深くかかわりあつていなかったことも、確かである。物語のなかで、優れた現実的写実的形象が、源氏の運命とかかわりえないところが語り継がれるとき、筋立てへの参加を拒否したところから、作者はそれらの現実的形象の客観化を、それではどのようにして強調しているのだろうか。たとえば、草子地と云われるもののなかに、二つの異なる技法がある。

その一つとして、「胸のうちつぶるるぞ、うたであるや」(薄雲)「片端まねぶもいとかたはらいたしや」(薄雲)「げに類多からぬ事どもは、好み集め給へりけむかし」(螢)などと、作者紫式部が物語の途中で顔を出して、偽装的な技巧^{注5}によって、その客観化を正当視させているような場合が多い。しかし一方、螢の巻のなかで、源氏が玉鬘の親でないことを、玉鬘にも右大臣にも秘密のまま、玉鬘に奇妙な親心で接近する時などは、「心はずかしければ、いといたくも乱れ給はず、かくしていかなるべき御有様ならむ」と作者紫

式部は玉鬘の行末に読者の注視をうながしている。又、花散里の巻の最後の言葉「ありつる垣根も、さやうにて有様かはりたるあたりなりけり」——これは、中川の女の心変りを責めることもできない源氏が麗景殿女御、その妹の花散里を訪ね、心変らぬ花散里も、心変った中川の女も、どちらも道理では割り切れない、と作者紫式部をして賢木の巻から須磨の巻への悲劇の前に語らせた、がそれはひとつの源氏の女性遍歴の到着点であろう。作者は、夕顔の巻等昔物語の型によって優れた形象を生み落したけれども、もう一度物語の必然性現実性ある筋立ての保障によって玉鬘の形象を生み出そうとするときに、このような方法を取らねばならなかった。それは一部三十三帖で語り継がれた源氏の運命とかが遍歴した女性たちとの間からみあう場をもたせようとした、作者紫式部の必然的な苦悩である。構想の基底、支柱と云ったものからはづれたところで筋立てをすることの困難さ、又、物語のまことらしさを昔物語の型、日記、歌物語の中の型ではすでに保持し得ないことを、優れた形象を得た人物達が教えているのだろう。

そのような作者紫式部のさまざまな苦悶は、第二部若菜上下巻になると、どうなっているか。草子地という作者の素顔の偽装的な手法は「しりうごと」として女房達に肩換えされている。女三の宮の源氏への降嫁を聞きつけた、紫の上の女房達は、今迄平穩無事であった理由を述べたあと、「はかなき事につけても、安からぬことのある折々、必ずわずらわしき事ども出で来なむかし」と「しりうごと」する。気づかぬ風を装った紫の上は、もちろん、これから展開するであろうことを予測し凝視しようとしている。乳母、女房達、左中弁の「いやしき宿世」ゆえの「さかしさ」が、ここでは紫の上

の女房達によって、あらたな状況のもとで發揮されているのである。若菜下の巻で、五十の賀を間近にひかえた朱雀院が、女三の宮との対面のついでに、「かの御琴なむ聞かまほしき。さりとて琴ばかりはひき取り給ひつらむ」と「しりうごと」すると、その朱雀院の言葉が帝の賛同をとまって源氏に伝えられる。その経緯を見ると、朱雀院から帝、帝から源氏と各々の言葉が並列されているだけであるが、帝の賛同は現実的な力となって源氏に働きかけている。しかし朱雀院の場合は単なる「しりうごと」にすぎないものである。が女三の宮の乳母達の場合などは、源氏の推せんと源氏を取り巻く六条院の世界に対する不安という矛盾両面を持った「さかしき下人」の心づかいとして立ち現れる。それが紫の上の女房達によって、降嫁を迎え入れる新たな状況のもとで受け継がれるのである。それは、第一部の「草子地」のなかに見られた偽装的な手法とも異なる。なぜならば、東宮の賛同によってのけられた「いやしき宿世」の「さかしき下人」の「さかしさ」は、乳母、女房達、左中弁の宿世と不可分であり、その「さかしさ」は王朝貴族社会の不易な宿世的な人間に対立するものとして、物語の内部に沈潜し、次に、紫の上の女房達の口から語り出されるとき、降嫁という問題の進行の一端として、諸人物、源氏、紫の上などを変質させてゆくからである。女三の宮が源氏の手から離脱し、柏木の「ひたぶる」な恋から死への道程へと物語が展開してゆく時、かれらおよび降嫁事件の性格は変容していく。

ここでは、王朝貴族社会の物語、歌物語、日記から流出する主題と様式のヴァリエーションを固執し、なにひとつ王朝貴族社会の日常的なものからはみ出ることがないにもかかわらず、どの要素を

ひとつとってみても、日常的でないのである。シチュエーションが保持するそうした本源的な力が力として働いているのは、「しりうごと」の女房達がさまざまに作用しているからであろうか。この女房達の「しりうごと」は、動かない日常性のヴェールに被われている貴族社会の諸矛盾を、劇的なものに変質させてゆく役割を背負っていないであろうか。第二部において、人間的なものが構想の主柱としてあるのは、この女房達が「さかしき下人」として「いやしき世」をもって登場人物達とかかわりあう「しりうごと」を基底にしているからだろう。

注1 阿部秋生『源氏物語研究序説下』第五章第二節三「受領の意識」

注2 今井源衛「女三の降嫁」『文学』1955.6 に詳細な検討がのっているので省略する

注3 同前

注4 阿部秋生『源氏物語研究序説下』第六章二「第一部三十三帖の骨格」

注5 同前第五章第二節二「実話的生格」

注6 今井源衛『源氏物語』岩波講座 日本文学史「構想の基底」

(三十四年卒)

(六八頁よりつづく)の助けて、父の出すいくつもの難題を解きながら、最後には、父の教えに従ったため、大洪水に流され、一年に一度しか会えぬ星となってしまふ悲しい夫婦愛として形象された。

オホクニヌシとスセリヒメの婚姻話の文学性は、そのような文学方法によって支えられている。彼ら二人は二回まで、父の出す難題を解いた、蛇の室も呉公と蜂の室も、そのように両者の協力をくりかえし語るうちに、両者のもつ愛情の深さ豊かさを聴き手の心にしみ込ませる。夫の試練をその度に比礼をもって来て助ける妻、それがくりかえされることによって二人の愛に対する聴き手の共感は深められて行くのである。そして三度目の矢をとらせる難題、これはもうスセリヒメの手に負えることではない。前の二回のくりかえしがあるからこそ、スセリヒメが「喪具いものを持つて、哭きて来」るのに聴き手は強く心を動かされ、オホクニヌシが鼠に救われるのを喜ぶのである。そして更に八田室の大室

の試練、このときも、スセリヒメは牟久むくの木の実と赤土とをもって夫を助ける。

二人の愛の深さは、二人のくりかえされる行為によって示される。

このように行為のくりかえしによって人間のもつ質を見極め、空想の中の人間形象の方法として用いるのは、呪術宗教的儀礼とはあきらかに異った次元に立っている。儀礼によっていくつもの苦行をうけることが、難題提起の基礎とはなっているけれども、古代人たちはそれを更に人間認識、人間理解の方法へと引き上げて行く、私はこの古代人の豊かな空想の中にひそむ智慧と力を見出さなければならぬ。

こうしてつくり出さした「くりかえし」の文学手法が、やがて口承文学へ、更にまた、物語の文学へと展開していくのである。

(糸井久)